

美術教育

伝承と発展そしてヒューマニテイ I、それが美術

福田好孝
十河幸喜

はじめに

なんといつてもこの分科会の宝は、子どもたちが授業で制作した作品が持ち寄られることである。参加者数は十一名、レポート数は九本であった。参加者の数はやや減少したものの、レポート数は昨年と同数となった。保育園から小学校、中学校そして高校まで、子どもの成長に沿った現場での実践交流ができた事は大きな財産を得たといえる。また、教職を目指す大学生の参加や発言に心の目を見開かされたことも大きな収穫といえる。

討議は作品づくりを通して、教師自らが辿った過程を検証しつつ、この教科・科目の根幹を成す要件について語り

合う貴重な時間となった。作品を持って発表する先生方の目は輝き、表情や口調は生き生きとしたものであった。しかしながら、現行の学習指導要領の施行による時数削減、造形遊びの導入により、幼少時から積み上げるべき造形体験が希薄になってしまった子どもたちの実態。専任教員の不在、などマイナスの要素も加わり、その眼すら曇りに転じる場面もあった。

図工・美術教育は発達を保障すべき教科であるにも関わらず、教育現場では、評価と結果を重んじ、興味・関心、自主性という言葉に置き換えた、見栄えの良さ、写真の描き写し、表面を正確になぞる、統一した方式による請け売り指導など、とても、発達と表現を結びつけているとは言い難い授業に陥る。確かに、本物そっくり描くことができれば、他からの評価も良いだろうし、平均して似た絵が並ぶ結果も得られるだろう。「失敗しないで描く・描かせることができた」という評価と結果は、きつかけとしては良いのかも知れないが、追求すべき内面の試行錯誤から生まれる表現とはかけ離れたものになる。手順を間違えず描き進めるだけでは、自主性、自発的という奇麗な言葉に置き換えられた偽りの造形の時間といわざるを得ない。自己の表現力の発達が保障されないままに加齢しているのが実情であり、個の獲得には残念ながら遠縁である。

子どもを取り巻く状況のみならず、大人社会全体が我慢を強いられている状況下であればあるほど、美術の空間ではダイナミックな視点と大きな心が必要となる。作品づくりは、ヒトと人とが繋がる大切な時間と心を育む行為であり、それが美術教育であると確信する。

実践報告

伝承される文化・木版画による卒園記念制作

深川市 齋藤 恵



二三年間、多度志保育園に受け継がれる巨大木版画が、この美術教育分科会会場に必ず掲げられる。草創期は現在の倍のベニヤ六枚もの大きさであったという。今の分科会会場では、貼りきれぬ壁が無く、そのような環境ではない。

齋藤先生はボランティアとして現職時代からこの園の版画制作に関わってきた。「あくまでも僕はお手伝い…」とし本人は言う。しかしながらそれは、単に

手順や技術指導だけではなく、園児一人一ひとりの体験を分化させるべく、活動を後押しする。

画題になるのは常に「体験」であり「日常」である。実体験を伴うからこそ「何とかしたい」という気持ちに及ぶであろうし、大人も子どもも体験を共有していれば尚のこと「くしたい」という欲求は高まり、制作の進行と共に深まりをみせる。ベニヤは地元での特注品であり、常に切れ味を損なわないための砥石や、園児の手に馴染むよう考案された彫刻刀の柄は齋藤先生の自作である。作品の大きさも然りではあるが、完成に辿りつくまでの過程を楽しむに変える工夫と寄り添いがそこにある。

園の玄関ホールには、今年もまた卒園制作が掲げられる。やるべきことをやり終えた気持ちで園を巣立っていくのであろう。

飾られ、受け継がれる版画は、あつて当たり前の作品であり、園を取り巻く環境そのものが、文化の伝承を担っているのである。

見て描く絵の指導 「上靴・ランドセルを描く」

別海町上西春別小学校 中村 訓子

「日本一の酪農郷」そして、「日本一広い自衛隊の演習場・矢白別演習場」のある町。その中にある小学校、六年生二

四名との図画工作の実践報告である。今年度で教員生活を終了されるという。その指導は、若々しく、持ち込んだ子どもたちの作品は、瑞々しく、レベルの高い作品群となっている。

美術教育は専門ではない。「地域の歴史と風土と教育との結びつきを考える」という「生活教育サークル」での若い教員たちとの交流、情報交換を通して美術教育に取り組んできた。研修の積み重ねで、専門教員以上の成果を上げている点、見習わなければならないと思う。

実践は、上靴やランドセルを題材に、観察を目的として、確実に描かせようとする指導である。「身近にあるもの」で「よく見れば描けるもの」逆に「見ないと描けないもの」という観点から題材を選択している。

小さい頃は何も考えないで好きなように描けた絵がいつの間にか「苦手」になるのは、「目と手のギャップにある」との考えから、工夫に工夫を重ねての指導になっている。系統立てた指導方法は、大変ていねいである。立体表現を確実にさせるために直方体や立方体の見取り図の勉強にも取り組ませている。

良い作品を制作させるためにさまざまな絵画制作方式も取り入れている。技術をしっかりと教えることで、子どもたちの「上手く描けた」「リアルに描けた」という満足感、

達成感につなげている。長い経験に裏打ちされた指導は、見事である。

白と黒の世界・切り絵

「表現することは生きること」

枝幸町立枝幸中学校・小林 清一

道北の港町、いわゆる荒れが、十数年続いてきているが、地域保護者、教師との力あわせにより、子どもたちに寄りそった教育活動を創り出している学校での実践である。

「与えられた枠から自分自身の創造性へ」というテーマを持って、主体的表現活動を保障しようというスタンスで向き合っている。子どもたちは、自由を求めつつも、まるつきり自由では何をして良いのかわからなくなる。白い紙を渡して、自由に描いてみようでは、とまどってしまう。

① 適度に枠を与えつつ

② 自由度を感じさせ

③ 自分が今、何をすべきか

これらをはつきりわかるように題材提示することで、より主体的に表現活動を始めるのではないか？子どもたちの実態に立脚した分析であると思う。

実践報告は、「白と黒の世界・切り絵」の制作である。前述の教える側の設定したテーマに沿った題材の与え方が見

事である。全員に単純な同じ形のマークを課題として提示、スタートラインをそろえ、そこから、自由に発展させる、そして、最初に与えた枠を子どもたちの創造性がどんどん越えていくのである。発想や造形に上位方向が生まれても、下位方向への差が生まれない。作品のレベルに差を作らない指導は大切である。

美術の授業を通して成長を育み、自立の道へ育んでいる。芸術教科の持つ情緒的な感性の育成を確信できる実践となつている。小林実践は、誠実である。根底には「表現することは生きること」というゆるぎない信念があるからだろう。

鑑賞「鑑賞六十α」日本の伝統工芸・

最近の実践から・美術館巡り

美深町立仁宇布小中学校 茶谷 裕樹



山間の寒村、山村留学実
 施校で、中学生は八名。東
 京、大阪、名古屋方面から
 来ている山村留学生の子ど
 もたちとの実践である。

長年、鑑賞の授業実践を
 続けている。これまでは、

美術史上の作品、芸術家などを取り上げ、その時代背景に光を当て、作品や芸術家などの側面を見る鑑賞に取り組んできた。今回の鑑賞実践は、「焼物」である。それも、自らが、長年、自分の足で蒐集してきた日本各地の「ぐい呑み」が鑑賞の題材なのである。蒐集した「ぐい呑み」が百個を超えるというのであるから強みがある。

鑑賞の授業といえば、視聴覚資料やプリント資料を使つての実践がほとんどであるが、「ぐい呑み」という焼物の実物が資料というのも興味深い。視覚だけでなく、触覚からもはいることのできる授業実践である。日本の焼物の歴史や種類、その分布、形の美しさや機能美（用の美）を教えていくねらいもしつかりと定めている。用の美を教えることから、篆刻の印鑑の持ち手部分のデザインへ発展させようというねらいも計画性がある。

茶谷実践は、その切り口が、独創的でおもしろい。日頃から、さまざまな美術に対して視野を広げようとする姿勢にその源があるようだ。北海道内外、海外の美術館や展覧会に数多く足を運んでいる。自分への情報入力が子どもたちへの発信につながっている点に感服する。エネルギー豊富な行動力が授業へ、子どもたちへと伝わっていく生きた実践である。

水墨画 前年度の「鳥獣戯画(甲巻)」作りについて結果と課題

網走市立第三中学校 成田 悠



生徒からのアンケートや作品制作を基に自らを省み、昨年度に続くグループ制作の実践報告。ひとつの作品をつくりあげるまでの過程は、七項目十六時間に及ぶ。昨年度の事後アンケートでは、「一人でやりたい」など「グループづくり」に対する表れが寄せられた。実際、意見が合わず、担うべき甲巻としての一場面ができず終了というグループもあったという。墨だけで描く個の制作には抵抗なく取り組み好評ではあったが、である。グループ制作である以上、他を尊重する心を持ってなければ、創りあげようとするところには届かず、個のイメージのみが優先する危険性もある。自己を認めてもらいたい多感な時期ゆえに生じる葛藤や摩擦。こういった状況でありながらも、美術の授

業であえて取り組むのであるから、指導者側には相当な決心や苦労があったはずである。最後は各グループで制作されたコマを繋ぎあわせる。このことよって絵巻物としての連続性のある物語が、時空と共に生まれる。そして取組んだ時間や行為全てを完結させる。

昨今、新学習指導要領での焦点「言語活動の取り組み…」は、以前から美術教育では当然のように行ってきた活動であり、認め愛の行為である。絵を繋ぎ合わせていくことは、ものづくりを通じて人とヒトとを繋いでいるようでもあり、美術が持てる力そのものでもある。これを幹とし、次年度への計画である「室町〜江戸時代にかけての水墨画・屏風絵・襖絵も手がけたい。」自らも高めよう日本美術を題材にすることによって、更に認め愛も進化(深化)することに期待したい。

「二〇一〇毎日の美術教育実践から」

岩内高等学校 福田 好孝

「生徒の実態もある。その実態に合わせて消極的になっていることも一因かもしれない。」ご本人のレポートのまとめの行である。常に、どのようにしたら意欲的に取り組むのか、分析も当然のように行っている以上に、絵を描かせる・創らせるといふ、美術室で繰り広げられる生徒と共に

有する空間の中から次作へ昇華させる手立てを講じている。決して消極的ではない。

やはり、いつものように目の前のものを描くという仕事を大切に行っている。今回は「自分の手」である。制作手順も然りだが、制作案内「ART IWANAI」に書かれたちよっとした「仕事はていねいに!」「伸びやかに描く」に向わせるべき方向性が記されている。この「手」に限らず、より丹念に描かれた作例を「ART IWANAI」で紹介するなど、奮起



させる仕掛けも作っている。見て描くという仕事をじっくり時間をかけて高校美術の始めとすることで、制作の広がりを求めるべくして、次作の心象的表現の点描や立体造形へと繋げている。

また、「岩内高校という名を少しでも出させたい」機会を逃さず、多種コンクールに出品させるなど、集団として自信に繋げる取



り組みも行ってはいる。投げっぱなしや預けっぱなしではなく、取り組むための手立てや、好機を逃さない寄り添いがそこにはある。

制作を続ける中から、自分を見つめさせ自己を獲得させる。福田実践の根幹を成すものは「生きる力は美術教育でつけられる」と自身を信じ、対面する全てと向き合い進んでいるところである。美術に対する執着心がなければできないことではない。

美術を学ぶとは―教科の存在意義を問う―

但知安高等学校 本庄 隆志



本庄実践は、ゆるぎないということがしつくりくる。また、その指導の丁寧さ、緻密さには感心させられる。「今年で現役最後……」と言いつつも日ごろの現場での実践を生徒の作品を介していつも通りの淡々とした交流が成された。

一つの題材に取り組ませる時、必ずその分野の背景や歴史が紹介される。更に波及し時代背景や代表的な作家、その作品の扱われ方や結末までに及ぶことがある。しかしそれは、単純に興味関心を誘う中身ではなく、その作品を創

るにあたって、必要とされる技術的要素や、本来的目的を外す事は決してない。

「鉛筆を使って瓶を描く」では、じっくり見て観察させるだけではなく、鉛筆の持つ魅力を引き出すべくグラデーシオンも経験させる。「小中学校で経験しているはず・高校だからこのくらいはできて当たり前」というスタートは切らない。

「これを描くに当たって今必要とされることは何なのか」を見極め、逆戻りに見える仕事を見せて行うのである。到達点を見据えて必要とされることは確実に行う。「アピール性のあるポスター」では、どの作品も美しい。平和を願う時、表出される画面はポジティブで、ヒューマニティーという向うべき方向性をつくる。情報量は膨大、しかし本当に知りたい情報や正しい情報を得るのは困難な昨今、他の教科・科目と手を結び



ながら深めさせる。けつして表面の見栄えの良さや、奇麗さだけを追うものではない。裏づけという思考的作業も行ってもいる。このことは青年期という「〇〇力」が格段に伸びる時期ゆえの、自己と社会とを向き合きあわせることにもつながっている。また、自らがこだわり続けている石膏での抽象彫刻は、立体をつくるだけではなしに、ジオラマを用い出来上がった作品を二次的な存在へと変化を持たしている。

その時期を逃さず、社会情勢を冷静に捉えるアンテナを張る。そして自らの拘り、さまざまな角度からの揺さぶり、触手の多さには感心させられる。作品をつくる生徒と真剣に向き合ってきた本庄実践から学ぶことは多い。

美術×札幌白陵高校の場合

札幌白陵高等学校 大崎 智尋

札幌市内の指導困難校での、転勤一年目の奮闘、努力の実践報告である。退学者も多く、恒常的に荒れが続く高校での美術の授業であるから、困難を極めていることも容易に想像がつく。

最初の授業時が勝負との考えで、一年生から三年生まで全く同じ内容で授業に臨んだ。

①青年期の心理について

② 高校で学ぶべきこと

③ 美術の授業でやるべきこと

などを伝えることから始めた。青年期の心理では、なぜ、いらつくのか。高校で学ぶことでは、自分の中の「大人の心」を鍛えるために学ぶことを。美術の中でやるべきことでは、自分と向き合い、自己表現することを。自分の考え、自分の言葉で伝えることを大切にして、目の前のどちらかといえば学校に背を向けてきた子どもたちに、まっすぐに向き合おうとしている。信念を持つての取り組みは、教師のあるべき姿勢として教えられることが多い。

指導の方法も、実態に即して、臨機応変に対応している点も評価できる。指導する側や課題の到達レベルのハードルを下げて、表現活動を保障してあげることも大切なことであると考え。また、授業中に子どもたちの目の前で一緒に同じ題材に取り組んで指導するというスタイルをとっていることも素晴らしいと思う。

子どもたちの授業に取り組む姿、制作姿勢に変化が感じられるとのこと。まだまだ時間はかかると思うが少しずつではあるが着実に前進している。今後の更なる奮闘に大きな期待をし、心からの声援を送りたい。

「寿司に茶・刺身に蜂蜜」()の中の真実」

江差高等学校 十河 幸喜



十河レポートは、いつものように檜山合同教研の報告から始まる。自分の足場である檜山の教育研究会に毎年参加している。その地域の小学校、中学校の先生方とともに、図工・美術教育の実践を学び、その延長線上にある高等学校の美術教育に生かし、つないでいこうという考え方を根底に据えている。(檜山合同教研・美術分科会参加者数は、今年度は倍増、檜山での美術教育の連続性を目指す地道な努力が実っている)

実践報告で並べられた子どもたちの作品には、確実な確かな仕事ぶりが目立つ。「デザイン・平面構成」作品は、構成の緻密さ、彩色の美しさが、目を引く。制作初期の段階で図案の構成方法や展開技術、彩色技術を獲得させているのであろう。技術習得が作品完成後の充実感へとつながることを押さえた上での指導と、作品制作過程での作品への

関わり方、作品に関わった自分の在り方を見つめさせることを目的としての指導は、明確で見事である。

また、大理石を使った立体彫刻「ココロノカタチを創る」では、逆に、技術を教えず、自らの造形的な欲求から技術を習得させようというねらいで迫っている。素材やその触感を大切にして、子どもたちの内面性を引き出そうという作戦なのである。

十河実践は、教えなければならない技術と自ら獲得させる技術を見極め指導している。ダイナミックな授業の中に確固たる方針があり、その中で子どもたちに伸び伸びと制作させている。美術で生きる力を教えている。

まとめ

昨年の本分科会でのまとめの行、「私たちはこの子どもたちの表現を保障して行く義務があり、そのための研究を絶えず行わなければならない。」一年間という時間を経た今分科会で持ち寄られた作品群がその証明になる。参加者の中には美術教育の専門ではない方も多い。美術専科の教師では気づかない視点や工夫が随所に見られる実践は心を惹き付ける。前述したように、どの作品をとってみても瑞々しくもあり、混沌とした内発性の表現だつたりする。



作品づくりを通して少なからず、自分を見つめたものであるといつても過言ではない。そこには、一教師自ら持つ一貫した拘りであつたり、生活年齢相応の真摯な寄り添い、取り巻く環境全てを丸抱えした姿勢の顕れでもある。

美術教育を取り巻く状況の厳しさは打開できず続いている。公教育に位置付けられている意味すら理解されず、孤軍奮闘を強いられている図工・美術の現場に向き合っておられる方もいる。しかしながら、そういった世相と対峙していながらも、目の前の子どもたちに多方向から洞察し正面から向き合うものづくりを通してヒトと人とが繋がる。それは心を通わせる人間性の教育であり、魂の教育なのである。魂や人間性なくして文化の伝承や発展はあり得ないだろう。そこを担っているのが美術教育なのである。

(岩内高校・江差高校)